

---

And I still want

ふるーつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A n d I s t i l l w a n t

### 【Nコード】

N 0 8 0 3 J

### 【作者名】

ふるーつ

### 【あらすじ】

とある夢から始まる物語。ある少女の、周囲の人間たちを巻き込んで明かされる秘密とは？  
初のオリジナル小説です。ファンタジーが好きでない人はスルー推奨。

# 1 夢（前書き）

いきなり本題に入っていますが、あまり長い話じゃありません。だいたいいたい10話前後で終わると思ってお読み下さい。

# 1 夢

ここは草原か、もしくは花畑か。

草が茂り、色とりどりの花が咲き乱れている。その向こうに建物があるようにも見えるが、どうもぼやけてはつきりしない。ティアスは、腰あたりまでそれに埋もれながら、ぼんやりと辺りを見渡していた。

と、誰かがティアスの手を取った。

見覚えのある少女だ。ウェーブがかった黒髪が風になびいてきれいに揺れている。

少女がティアスを連れていく。どこへ？ いや、誰の元へ？

疑問に思いながらも、ティアスにはそれがわかつている気がした。

……そう、きつとあの人のところへ。

その人は、幼いティアスと少女の前でかがみこんだ。微笑んで頭をなでる。ティアスは、少女と顔を合わせてはにかむように笑った。しかし次の瞬間、目の前が真っ赤に染まった。

その人は、全身血まみれになって倒れこんだ。ティアスの視界をあちこちから染める、赤、赤、赤。耳をつんざく悲鳴。叫んでいるのは少女だけではない、ティアス自身も我を忘れた。

いや、いや、どうして、どうして      !!

目が覚めると、もう朝日がさしていた。いやに鼓動が早い。

「あら、お目覚めですか？ 珍しいですね」

部屋に入ってきたセディの姿に、ようやく本当に目覚めた気がした。長いことこの家にいる精霊は、慣れた様子でせつせとベッドを片付けていく。

「フレア様が、朝食の支度をしてお待ちですよ」

「……はいはい。すぐ行くから」

いつもよりかなり余裕のある返事をして、ティアスは部屋を出た。

階段を下りながら、ぼんやりと考える。

あの夢は……。

夢に出てきた少女。どこかで会っている気がする。けれど思い出せない。……あれ？そもそも瞳の色はどんなだっけ？さっきまで見ていた夢なのに。

「どうしたの？」

薄茶色の髪が落ちる肩に手を置いて、ティアスの顔をのぞきこんだのは母フレアだった。

「そーそ。お寝坊さんのティーがちゃんと起きてくるなんて。明日は嵐かな？」

レージがからかうように言つのを視界から遮るように、ティアスはそっぽを向いた。

「ちよつと変な夢みて目が覚めちゃっただけだよ」

「変な夢？」

ティアスは夢のことをかいつまんで話した。レージはもう興味を失ったようで、朝食に戻っている。

「あの子……どこかで会った事あると思うんだけど」

「……………」

なぜかショックを受けたようだったフレアの表情は、ティアスの声で元に戻った。

「…あ、いえ。何でもないわ。じゃあ、ご飯食べて行ってらっしゃい」

いつもの「母の顔」に戻ったフレアに何となく違和感を感じながらも、ティアスは学校へと出かけた。姉レージと弟フォーセットも家を出る。フォーセットとは行き先は同じ学校だが、お互い友人に会うため、別方向となった。

家に残ったフレアと精霊たちの表情は、強張っていた。  
「フレア様……………」

シティが物憂げに、子供たちが向かったほうを見遣る。

「ええ……まずいわね。10年たって、術が弱まってきたみたい」

「今夜にでも、かけ直しますか？私もお手伝いいたしますが」

「いえ　少し待って」

「え？」と、シティともう1人の精霊　セディがフレアを振り返った。

「もしかしたら……もしかしたら、私がずっと待ち望んでいたことが叶うかもしれない。…もうしばらく、様子を見たいの。協力してくれる？」

葛藤が垣間見えるフレアの表情に、精霊たちは返す言葉もなく、しかし怪訝そうにその双眸を見つめた。

## 1 夢（後書き）

海外から帰国して心機一転、初のオリジナル小説を投稿することにしました。とはいえ、ストーリーは5年ぐらい（もったかも？）前に考えたものなので、設定とか細かい部分で無理があるかもしれないが（汗）。

「コレ変じゃね？」とか思ったらちゃんと指摘して下さい、修正できる部分は修正したいと考えてます。

あと、初めての方へ。私のこれまでの投稿作は全て二次創作です。

## 2 日常

キーン、ガッ！      カッ、ガキッ！

高い金属音が響く。時には、わずかな火花と共に。2人を中心にやや遠巻きの人垣ができているが、もはや2人の脳裏にはない。

幾度かの鏑迫<sup>つばせ</sup>り合いのあと、ティアスはいなした剣の勢いそのままに相手の側面に回りこんだ。

「っ！？」

そのまま相手の手元から剣を弾きとばし、ティアスはその喉元に切っ先を突きつけた。相手の少年      プロードは一瞬だけ呆気にとられたが、すぐに身体から力を抜いた。

「降参」

その言葉に、ティアスの顔からも真剣さ幾分か消えた。ギャラリ―となっていたクラスメイトたちから、歓声や声援が送られる。その中に親友のロイリーの姿を確認したティアスは、満面の笑みを送った。

「……お前って、ほんとに剣さばき上手いよな。俺だって毎日練習してるのに」

「私だって練習してるわよ。1週間前の腕前と同じだと思ってるから負けるのよ」

負け惜しみにしては清々しい台詞を、ティアスは朗らかに返す。実際、同じ学年でティアスに剣術で勝てる人間はそうそういなかった。

そのとき、クラス終了の鐘が、丁度良いタイミングで鳴り響いた。

「ほんと、ティーは剣術はピカイチだな。さっすが、おばさんと姉さんが『ツイスト』だけあるな」



「ありがとう」

お昼時。ティアスはロイリーと昼食をとっていた。この学校には食堂もあるのだが、芝生の上に持ってきたランチボックスを広げるのがティアスは好きだった。

「あ、でもロイのご両親も王宮勤めはしてたんだよね？」

瞬間、ロイリーの顔が心なしに強張ったように見えた。

「知らねえよ。顔も覚えてねーんだから。いいよ、今の生活でオレは満足してっから」

付け加えておくが、ロイリーの性別は女だ。

王宮勤めをしていたロイリーの両親は、彼女が生まれてすぐに亡くなったらしく、今は親戚筋の人と暮らしているんだそうだ。……

ロイリーが傍<sup>はた</sup>から見れば男としか思えない言葉遣いであることとの関連は、ティアスにとっては永遠の謎だが。

食事を終えたのは、2人ほぼ同時だった。

「さて、じゃあ約束な」

「え？……ああ、どっち先にする？」

「先に教えてやるよ。ティーは記憶するつてのがほんとに苦手だもんな？後で、ゆっくり剣教えてくれよ」

運動神経の鈍いロイリーが得意の歴史を、暗記が苦手なティアスが自慢の剣術をお互い教えあつのは、ふたりの日常だった。

「……そっういやさ」

「何？」

「ティーは、そんなに剣術鍛えてどうすんだ？」

ランチボックスを行儀悪く肩に抱えたロイリーが尋ねる。

「うーん……レージみたいに『ツイスト』とまではいかないけど、王宮の関係で剣が使えるところに入りたいな」

「そっか。ティーは筋もいいみてーだし、お姉さんみたいに優秀な剣士になれそうだよな」

「ありがと」

ティアスははにかみつつ微笑んだ。

## 2 日常（後書き）

次の話は午後に投稿できる・・・と思います。  
謎の言葉の意味はその話の中で。

### 3 始まり（前書き）

ここから本題に入ります。

### 3 始まり

王宮で、王子の誕生パーティーが開かれる。

その情報をティアスがゲットできたのは、姉であるレージが『ツイスト』だったからだ。

『ツイスト』は王宮の四方を守る門番。国中から剣術、魔術の技量を認められた者がその職務につく。レージはこの春になったばかりだが、その昔『ツイスト』だった母フレアの遺産なのか、年齢としては最年少に近い。友人知人の間でも、将来を嘱望しよくぼうされている。

名誉職でもあるので希望者は多いが、『ツイスト』が羨望の眼差しを送られるのはそれだけではない。王族の誕生パーティーに出席を許されるのは、『ツイスト』とその家族だけなのだ。どうしてものかと問われると、多分誰しも首をひねるだろう。昔からそうだから、としか答えようがないのが大方の人間だ。それは『ツイスト』経験者にしても同じで、ティアスは今まで答えられる人物に会った事がない。

「終わるまで、友達に言っちゃだめよ。ロイリーさんにも。絶対ね」  
パーティーの日取りを告げる使いを返したあとで、フレアはティアスに念を押した。

「わかってるよ」

内心呆れつつティアスは応じた。そんな、どんな言い方をしても高慢にしかない話、雑談の種にもならない。

…とはいえ、これはパーティーの保安のためだろうと思われた。会場内はいい。たとえドレスアップしていても、『ツイスト』たちならどんな輩がいても返り討ちにする。しかし、パーティーの夜は警備は手薄になる。治安の悪い国ではないが、不屈ふくき者はどこにでもいるものだ。

「なあ、そっぴやあの人ハ来るのか？」

フォーセットが、ふと思いついた様子でレージに尋ねる。

「あの……『シルス様』」

数瞬、一同そろって固まった気がした。まっさきに自己解凍したレージが首をひねる。

「んー……彼女、気まぐれって話だからなあ。あたしも、会ったことはないんだよね。なんでも、いつも城の片隅に閉じこもって全然出てこないらしくて」

「え？ 姿見たこともないの？ ……死んじやってたりしないよね？」

「こないだ見たって人がいたらしいから、とりあえず大丈夫だと思っけど。……というか、本当に王の隠し子とかじゃないかって時々思うよ」

王族「らしい」人物について失礼千万だが、レージを責める人間はこの場にはいない。

その名は知っているが、身元はさっぱりわからない通称『王族』

それが『シルス』という存在だった。そもそも、どうして「その人物が王族といわれるか」も、「その存在だけが公になっているか」も不明なのだ。とりあえず「性別は女」ぐらいの情報しか仕入れられる者はいないし、仕入れる気もない。「王の隠し子ではないか」なんていう話もあるにはあるが、いかんせんデータがなさすぎる。

ティアスがその話を知ったのがすでに何年も前の話なのだが、どうも「彼女」の人間性がわかるようなエピソードもない。かつて『ツイスト』だったフレアも、彼女のことは知らないと言っていた。

「はいはい、噂話はそこまで。パーティーには正装して行かなきゃいけないんだから、ちゃんと準備しなきゃね。楽しみでしょう、王や王妃様にお会いするのは」

少々強引な母の割り込みで立ち消えになったその話を、その後、

家族間ですることはなかった。

話に割り込む寸前、フレアの表情がひどく歪んだことにも、  
気付く者はいなかった。

### 3 始まり（後書き）

これ書きながら自分がかつて書いた文章を見直してみると、結構粗があるもんだ。

この回の文章は半分ぐらい書き替えました。青いな自分。

とはいえ、設定の部分は自分の中ですでに定着していたりするので、粗とか見つけづらいですねー多分。  
感想など頂けたら嬉しいです。

## 4 邂逅

初めて目にする王宮の城門を前に、ティアスもフォーセットも少しばかり緊張していた。

ただの、姉たちへの慰労を兼ねたパーティーではあるが、やっぱり滅多に拝めない王族とじかに対面するというのは、いささか緊張するものである。

そんな子供たちの様子を視界の端にとらえながら、フレアは「行くわよ」と簡単に声をかけると、ひとつ息をついた。

衛兵に、フレアは青いビー玉を差し出した。玉が淡く光ったかと思つと、次の瞬間には玉に封印されていたセディが姿を現した。その精霊をつくりと見つめ、衛兵の表情が少しゆるんだ。

「結構です」

この精霊が、入場できる証となる。

『ツイスト』は任命されると同時に、各自精霊を与えられる。そして、パーティーの通知を受け取った者の精霊だけが、「正規招待者とその同伴者であること」を証明することができる。

この方式は昔から適用されているようで、シティもかつてはオレンジ色のビー玉を使つたらしい。

小物入れにはそのほかに、古そうな別のビー玉もあったような気がしたが、フレアが話題にしないので、気のせいだったらしい。

実際、ティアスはよく知らなかった。精霊が与えられるのは、『ツイスト』だけではない事を。

会場には、すでに招待者のほとんどが集まっているようだった。おそらく『ツイスト』本人の人数こそ大したものではないが、その大半が連れている同伴者を含めると、結構な人数だ。誰も彼もが思い思いの正装に身を包み、立食パーティーを楽しんでいる。



「……うつわー。これじゃ、『ツイスト』本人が誰かも、よくわからないね」

「…だな。レージだって、よっぽど親しい奴じゃないとわからないんじゃないか？」

感嘆の声をあげる妹と弟に、レージは苦笑しつつ無言を通した。

パーティーに決まったプログラムはないようだった。司会もおらず、優雅なBGMと上品な料理が雰囲気を出していた。そして、ティアスたちが到着して少しすると、会場内が一気に沸いた。

王家の登場だ。

「王子！」

「ヘルド様ー！」

「王子、おめでとーございます！」

歓声や賛辞の言葉が、あちこちから沸きあがる。両親に連れられて現れたその少年は、まだ幼さの残る顔をわずかに染めて、はにかむように笑った。

口を開いたのは、王妃だった。

「皆さん、今日はよくいらっしゃいました。将来この国を背負って立つべきわが息子も、今日で9つとなりました。皆さんの、日頃の活躍のお陰です。これから、わが王家を引き立てていって下さいね」

彼女の挨拶のあいだ、傍らの王は穏やかに会場内を眺めていた。

挨拶はそれだけで、あとはパーティーを楽しむ参加者のもとへ、王家の面々が訪ねていた。

「……あれ？ねえレージ、お母さんは？」

「ん？そういえば、さっきからいないわね。まあ、多分トイレでしょ」

ティアスの言葉に一瞬だけ怪訝そうな顔をしたレージだが、すぐに友人との歓談に戻ってしまった。薄情にも見えるが、レージは母

を信頼しているのだ。人格面でも護身の面でも。

一応探してみようと会場を離れ、喧騒が届かなくなった通路を歩いていたティアスは、窓際に何かいることに気付いた。

ウェーブがかった長い黒髪の頭の部分を結び、上品なドレスに身を包んだ少女。

まさか　と、ティアスは内心でつぶやいた。

(……『シルス様』?)

彼女は壁にもたれて眠っている様子だった。少し濃い眉、標準的な体つき。とりあえず「可愛い」「範疇に入るだろう少女。

「あの、……どうしたんですか？」

声をかけながら肩に手を置く。すると、弾かれたように少女は唸りだした。

「……う……う……」

「え？あ、あの……具合悪いんですか？誰か……」

「大丈夫……ウィルトン、いつもの……だ、から……」

喋ってくれたと思ったら、どうも人違いされているらしい。しか

し　顔を上げてティアスと認めた彼女は、そのまま凍りついたように言葉を失った。

「……………」

「……え？」

ティアス自身、どう反応しようか困っていると、どこからか別の声が飛んできた。

「姫様！また発作ですか？お部屋に……！」

クリーム色のショートカットの精霊だった。しかしその精霊も、ティアスの顔を見るなり声を失った。

「……えーっと、何か？」

ティアスがおずおずと声をかけると、両者とも我に返ったらしく、少女はぱつとつつむくと無言で踵を返し、精霊はあわてて後を追った。

「……何なんだろ、一体」

早足で回廊を歩きながら、彼女はみずからの精霊に尋ねた。

「ウィルトン。私は……何か言ったかな？」

その声が震えていることには、気付かないふりをして。その様子に痛々しく顔を曇らせた精霊は、一息ついて答えた。

「いいえ。私の記憶の限りは……。驚いてしまって、声が出なかったようです」

「そう……」

それだけをつぶやいて、シルスはふいに口許を緩めた。そして目を閉じる。

元気で、いてくれた。生きていてくれた。私の大切な、たった一人の。

## 5 疑念

涙で前が見えない。

どうして？どうしてこんなことになったの？私たちは、何も悪いことなんかしてないのに。

ただ、ちいさな世界で静かに生きていただけなのに。

……目の前で気遣わしげに自分を見やるその人が額に手を触れたその瞬間、世界が…変わったような気がした。

「……また、夢か」

宿題中に転寝うたたねしてしまっただけ。問題は進んでおらず、いい加減本気にならないとやばいかもしれない。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。答えると、レージが入ってきた。

「何？」

「ん？なんか最近あんた、時々ぼーっとしてない？何かあったの？」

「…あのさレージ」

ふとティアスは、1番確認しやすいことだけは確認してみようと思っただけ。

「『シルス様』ってさ、……女の子なんだっけ？」

いきなりの問いに、レージは一瞬「は？」という顔をした。

「……ああ、そう聞くけどね」

「他に知ってることある？」

ティアスの意外に真剣な表情に首をかしげたレージだが、しばし唸ってから続けた。

「小さい、らしいよ。学校に行くか行かないか、ぐらいの歳で聞いたことある。あとは……そう、髪が長くて腰ぐらいまであるってこれでもいい？」

「うん。十分、ありがと」

途端にティアスの語調が変わったのは、確信が持てたからだ。自分が見た少女とおおまかな外見が一致するだけではない。王宮主催のパーティーで働かずにいられる人間なんて知れている。彼女は侍女の類ではない。

恐らく、噂通りの王族の一員なのだろう。問題は、誰から枝分かれした先の人物なのか、という所だが。

（……………それに）

あのときの、彼女の顔が時折目の前にチラつく。なぜ、彼女はティアスを見てあんなにも驚いていたのか。会場に通じる通路に人がいることはさして不思議でもない。それは、あの精霊にもいえることだった。驚愕、というべきか。あの表情。

（あの2人、……………私を知ってる…？いや）

ふと思ひ浮かんだ考えを、即座に否定した。いくら母親が元『ツイスト』だからって、まだ学生の娘の顔までそう知られているわけがない。現『ツイスト』のレージすら、彼女とは面識もない。

（それに……………）

フレアは、どこに行っていたのだろう。あの後、しばらく探したが見つからなかった母は、パーティー終盤になってどこからかヒョコツと現れた。「ごめんね、トイレを探してて」なんて笑っていたが、トイレなんてティアスはとくに搜索済みだった。

そんな思考の海にはまりかけていた時。

「レージ、ティー、フォース、ちよつといらっしゃい」

思考回路が途切れたティアスは、レージと連れ立って階下に降りた。嬉しそうなフレアの手には、何事か書かれた紙。

「お父さんからよ。来週帰るって」

仕事で各地を飛び回っていて、たまにしか帰ってこない父からの手紙だった。彼の仕事が忙しくなってから、母子は時折届く手紙を回し読みするのが恒例だった。

「今度帰るときは、どんな土産持ってきてくれんだ？」

「最近はどうも感覚が鈍ってきたようだから、あんまり期待しないほうがいいんじゃない？」

手紙だけは毎月ちゃんと寄こすものの、幾月かごとにしか帰らない父は、最近の意味のわからないものを土産として持ち帰るようになっていた。前回は珍しい柄のティーカップのセットに、なぜか発育不良のキノコが添えてあった。

しばらくその話に花を咲かせた後、子供達がまた自室に引き上げると、フレアはシテイに意味ありげな視線を送った。

「ちよつと、城までお使い頼めるかしら？」

「……構いませんが、ご報告に意味がありましようか？彼女は出歩くことはできませんし、術をかけなおせとお返事されることは明らかです」

「ええ、そうね。でも、私は今のままじゃいけないと思うのよ。噂からすると、これは私の想像だけれど、あの子にはもうあまり時間がないわ。状況が変われば、もしかしたら……。私が自分で行っても、おそらく話がこじれるだけでしょう」

シテイは複雑そうな顔をしながらも、ひとつ息をついた。

「……わかりました。では、今夜にでも」

「そうね。頼むわ。…来週には、あの人の耳にも入れておかないかね」

## 6 発覚

「王、失礼いたします」

「……メーチか。どうした？お前がここまで出向いてくるとは」

ほんの少しだけ顔を上げた王は、また書類の山に視線を戻した。全て決済書類だ。

「あのパーティーの後、シルス様にお会いになりました？」

「いや。すぐに部屋に戻ってしまったようだ。元々、ああいうものが好きな子ではないしな」

「いえ……無理もありますまい。あのパーティーに、例の『姫』がいらしたようですから」

王の手が止まった。思わずといったふうになり、顔を上げる。

「……………本当か？」

「私の力不足でなければ、間違いございません」

そうか、と呟いてから、彼はメーチを見据えた。

「……無事だった、ということだな」

「そのようです。現在の身元を探りましょうか？パーティーの参加者なら『ツイスト』の身内。難しいことでは――」

「いや。こちらが調べれば、元老たちも感づく。かえって『あの子』の身が危なくなる。今現在王家と無関係なら、それで通したほうがいい。あのジジイ連中に、要らぬ波風を立てられるのは御免こうむりたいからな」

最後の一文に、メーチは苦笑した。

「ご自分の補佐である元老たちに向かって、随分な言い草ですね……。承知いたしました」

「ああ。ご苦労だったな。持ち場に戻るなり休むなり、今日は自由にするがいい」

王の執務室を退室したメーチは、ふと空を見上げた。満天の星空が広がっている。

「……これは、私への罰のひとつなのかしらね。あの子は……喜んで  
いるかしら？それとも」

珍しく姿の見えなかった精霊は、固い顔で戻ってくるなり、悪夢  
のような現実を知らせた。

「姫様、フレア様よりお使いが。どうやら、ティアス様の記憶が、  
部分的ながら戻ってきているらしいと」

瞬間、いつものように気だるげだったシルスの顔色が変わった。

「術をかけ直せ！そう応えただろうな？なぜ、わざわざ私にそんな  
ことを……！」

「シテイにも、わかりかねる様子でした。ただ、「私がずっと願っ  
ていたことが叶うかもしれない」とだけ……」

「……？」

一瞬だけ、可愛らしい顔を歳相応にかしげたシルスだったが、そ  
の報告は彼女にとって、このうえなく恐ろしいものには違いなかつ  
た。

その様子を、こちらも複雑そうに見守っていたウィルトンが、静  
かに口を開いた。

「……姫様、何を考えていらっしやったのですか？やはり      あ  
の時の……？」

激昂状態だったシルスの表情が、その言葉に落ち着いて……寂  
しげに。

「あの時、あの子が言っていた夢。あれは、叶ったといえるのかな  
……」

「姫様……」

おそとにでたいな。

そう言って笑ったティアスを、今でもはつきりと思い出すことが  
できる。

もつ自分の記憶の中にしかない、……遠い思い出。



主が遠い昔を回想していることは、容易に想像がついた。また、静かに口を開く。

「それは、私には何とも申し上げることはできません。けれど、ティアス様はきつとお幸せです。フレア様は、お母上が誰よりも信頼されていた方。姫様も、そうでしょう?」

「……そうだね」

つぶやくように答えてから、少々眼光を鋭くしたシルスは精霊に命じた。

「フレアとは、今後も直接会っな。あの能力があるとはいえ、元老たちの手のものは王宮内のどこにでもいる。あの子のことが、もしも露見したりしたら 私に元老たちを殺すようなことはさせるな」  
その気迫は、まさしく王家に名を連ねる者にふさわしいものだ。ウィルトンは、むしろ誇らしげに笑った。

「 承知いたしました」

## 6 発覚（後書き）

続きは年明けになるかと思われます。

## 7 苦悩

ティアスは、また夢の中にいた。

今度は、大きな建物の中。どこかで見たような造り。そのなかで、ティアスはやっぱり、あの少女と一緒にだった。

(……誰なの？あなたは……)

何となくそう思っても、言葉が口から出てくることはなかった。

ティアスは草花で作った首飾りをその少女と持ち、目の前のドアを開こうとしていた。

この先に、大好きな人がいるはずだから。

けれど照れくさくて、肘でつつきあたりしつつ、なかなか開くタイミングをつかめない。

思い切って開いたのはティアスだった。…しかし、その先を見ることを拒むかのように、ティアスの意識は急速に浮上した。

「おや……さすがにテスト当日だけあって、顔色がさえないね」

顔を上げた先にいるのは、サンドイッチをつまんだレージだ。

「今日は父さんが帰ってくるんだから、出来ばえちゃんと報告しろよ！」

「……わかってるよ。どーせ、また『もっと勉強しろ』とか叱られるんだから」

あれから1週間が過ぎ、父が帰ってくる日が来た。そして幸か不幸か、日と同じくして、テストの中でもティアスが苦手とする歴史のテストが、待ち構えていたのだ。

「2人とも、早く支度しなさい。ティアスは、テスト当日に遅刻する気？」

「だーいじょうぶだよ。ティーは俺と違って、5分で用意できんだからさ」

不毛な議論をさくつと断ち切ったフレアの常識的な意見も、フォ

ーセットのからかいで勢い半減した。

朝食を済ませ、ティマスが珍しくトイレに立つと（いつもは、そんな暇はない）、背後に人の気配がした。振り返ってみると、フレアが神妙な表情で立っていた。

「……お母さん。どうしたの？」

「……」

母は無言で娘の額に指先をあてると、何事かつぶやいた。

その呪文が何なのかを認識した次の瞬間、ティマスの頭は真っ白になった。

「……マス、ティマス！」

「……あれ？」

気がつくと、力の抜けたティマスがフレアにもたれかかり、彼女は心配そうに娘をのぞきこんでいた。

「大丈夫？テストだからって、無理しちゃだめよ？」

「え？あ、うん、大丈夫。心配かけてごめんね」

子供たちが出払うと、後片付けをするフレアに近づいた者がいた。

「さっきかけたのは、忘却呪文ですね」

「シテイ…見てたの？」

「行動が、少々不自然でしたので」

「あらあら、私もまだまだね。……まあ、あのまま放っておいても、部分的に戻ってくる記憶に混乱するだけでしょ」

シテイは、そこで戸口に向けていた視線をフレアに向けた。

「フレア様。フレア様が狙っておられることは一体なんなのですか？まさか、封印を完全に解かれるおつもりですか？そんなことをすれば、ティマス様のお心は」

「私は、シルスがたった一人で、死ぬまで苦しみ続けるなんて嫌なのよ。あの子はあの時から、セレスもティマスも失ったまま、心を閉ざしている。当然だわ。それだけの傷を受けたんだから」

「しかし」

「私だって、これが正しいと信じたいただけ。私はセレスを守れなかった。だから、シルスは守りたいの」

それつきり、フレアは片づけを再開するためにその場を離れた。その様子を見つめるシテイの表情には、哀愁が浮かんでいる。

さっきの忘却術が消したのは、おそらく「妙な夢を見た」事実だけだ。その夢の元になった記憶は、ティアスの頭の中で、彼女自身気付かないうちに蘇ってきている。それを止めないということとは、『術』を解くということだ。今朝ではない、昔かけられた強力な忘却呪文を。

「……それで、姫君たちが幸せになれるというなら、どうして今まで」

## 8 昔話（前書き）

ほかの話に比べるとちよつと長いかも。

## 8 昔話

「どうだった？今日の生態学」

「んー、まあボチボチってところ」

「……嫌味？」

「なんで。聞いてきたのティーじゃねーか」

おどけて返すロイリーに、ティマスはサンドイッチを一口かじった。

学年でトップともいえる記憶力をもつロイリーは、覚えればいいテストの出来はだいたい「ボチボチ」と言っておいて、とる点数はほぼ学年最高点だ。今日はずっと座学のテストが続いたが、歴史がようやく終わったのでティマスとしては一息つける。そして、例のごとく2人は裏庭で談笑中なのであった。

「じゃ、今度はこっちから質問な」

「何？」

「最近、なんか悩み事があんだろ」

ティマスは、思わず口を止めた。一応普段どおりにしているつもりだったが、さすがに親友にはかなわないらしい。

「……なんかね、お母さんに隠し事されてるみたいでさ」

「おばさんが？ティーに？」

「確証とかはないよ。ただ……なんか、そういう感じがして」

「ふーん……ティーに気付かれるなんて、ユルイ隠し方だな」

「変なところからかわないでよ！こっちは本気なんだから！」

言ってしまったから気付いた。ロイリーは今、わざとふざけて答えたのだ。多分、あまり落ち込ませないために。

「まあ、何か隠してるにしても、ティーの事を思ってたことだとは思っよ。おじさんもおばさんも、ほんとにティーを思ってくれてると思うし。あんな人たちが親だったらいいなって、いつも思

うしな」

「……そういえば、ロイのお父さんとお母さんって……」

「ああ、そーいや言ってなかったか」

ロイリーは食べ終えたランチボックスをしまうと、一息ついて口を開いた。

「王宮で働いてた。ってのは話したっけ？」

ティアスがうなずくと、ロイリーは微笑して続けた。

「まあ、オレは両親どっちも顔も何も覚えてねえから、これは聞いた話なんだけどな」

一息おいて、ロイリーの表情が心なしに締まった。

「オレの父さんと母さんは、当時の王様の召使だったそうさ。オレが産まれる少し前　多分、まだ仕事に支障をきたすほどじゃない時期だったんだろな。その王様は……いや、確か女王様だったな。その人は、国の外れまで休養に出かけたそうさ。そして、運悪く盗賊に襲われたんだと。その女王様をかばって父さんは死んで、母さんも……オレを産むとほぼ同時に死んじゃったらしいよ。」

運がなかったんだな、父さん。その事件、死者自体は少なくて、もう一人青年が犠牲になったぐらいらしいし」

語る彼女の顔はなにか世間話でも語るようで、しばしティアスは、言葉を返すことができなかった。

しばらくして思考が追いつくと、だいたいの事情がわかってきた。

「……それで、親戚の人に引き取られたってわけか」

「正確に、親戚ってわけじゃねーけどな」

「え？」

ロイリーは頭の後ろで手を組み、草原に寝そべった。

「ティー、その事件のこと知らなかったろ？教科書にも載ってねーし、授業でも教えねえ。なぜかその騒動は、事件のわりにはこぢんまりと終結させられてんだ。……ま、王家の誰かが死んだってわけでもねえから、そう不自然でもないけど。親に親戚がいたかどうか



もオレは知らねーんだけど、今一緒に住んでる親代わりは、その友人なんだってさ」

「ふーん……。ロイも、なかなか物語的な人生送ってるんだね」

相槌をつつたあとで、ふとした疑問が浮かんできた。

「……あれ？前の王様って女王様なんだっけ？」

ロイリーは、少し呆れたようにティアスを見やった。それくらい覚えておけ、と言いたげだ。

「まあ、教科書にはろくに載ってねえから、ティーが覚えてなくても無理ねーか。今の王様の姉で、血筋としては違和感はないな。因習にのっとりた妥当な即位だ。在位は10年足らずで、一時期なんか体調を崩したとかで引ッ込んでたようだけど、最後は病気で急死。確かに、歴史として覚えるようなことは大してやってねえな」

さすがに亡き両親が仕えていたらしい人のことで、結構調べているようだ。

「この事は、あんま口外しないでくれよ。オレ、こんなことで注目集めたくねーしさ」

ちらりとティアスに目をやったロイリーはどこか寂しそうで、ティアスはほんの一瞬、言葉に詰まった。しかし、すぐにいつもの「親友」の顔に戻った。

「決まってるじゃん。ロイは私の親友なんだから。……ありがとう、話してくれて」

その言葉に微笑んだロイリーに、話題をいつもの雑談に戻しながらティアスもランチボックスをしまった。

## 8 昔話（後書き）

ようやくと本題出ました。わかりやすい伏線で読みやすいといけ  
ど。

## 9 再会

その夜。子供たち（というかティアスとフォーセット）の学校でのテストの話や、レージの力自慢を苦笑交じりに聞いていた父、それを少々慥然とした顔で眺めていた母を残し、すでに家の中は寢静まっていた。

ティアスが喉の渇きのために目を覚まし、寢室を出たのはおやすみを言っただけで後だった。

会談を静かに下りていると、部屋の薄明かりが見えた。両親はまだ起きているようだ。

「……やっぱり、当初の懸案事項<sup>けんあん</sup>が当たったか」

「それで、私はシティ達を説得して、あの子を戻してあげたいと思ってるの」

「あの時言っただように、結論はお前に任せるよ。シティの主張どおり記憶を封じ込めなおすか、お前の望みどおり時機をみて術を完全に解除するか。ティアスも、事実を聞いてもいいくらいの歳にはなっただと思うし、それほど弱く育ってもいい。……あの時の、お前の見通し通りじゃないか」

何の話なのか、さっぱりわからない。

不意に、コップを机に置く音がした。

「……じゃあ、相談する必要もなかったわね」

「いずれこうなる可能性は、10年前から多分にあっただけから。お前が決めたことだ。責める気はないさ。ティアスを、実の娘として育てるってな」

（！？）

頭の中が真っ白になった。視界がぐらついた。

今、なんて言った？

「へえー、前とは飾り付けをちょっと変えてるんだね」

「まあ、さすがに同じじゃ味気ないでしょ。なんとなく女の子っぽくなってるじゃん。今度は王女様だもんね」

目の前の光景に見入っている妹に、レージが楽しそうに応じる。

今日は、ヘルド王子の妹リズ王女の誕生パーティーなのだ。

父はあのあと間もなくまた仕事に出かけ、面子は前回と同じだった。違うのは会場の装飾と、人々の衣装ぐらいだ。

王家の挨拶が終わると、間もなくティアスは「トイレ」と短く言い置いて、会場を離れた。しばらくは「同じ用件」の人とすれ違ったりしたが、やがていなくなり、会場の明かりもあまり届かなくなつた。

会場を広く見渡せる、しかし目立たないバルコニーになった所で、ティアスは彼女を見つけた。黒い癖のある髪を後ろでまとめ、

淡い黄色のドレスに身を包んだシルスは、つまらなそうにパーティー会場を見下ろしていた。その黒髪がいつかの夢の中の少女に重なつたのは、一瞬のことだった。

意を決して彼女に近づく。シルスは気配に気付いたらしく、ティアスに気付くと、また驚きと、今度は戸惑いのような表情を浮かべた。すぐさま踵<sup>きびす</sup>を返そうとする彼女に、続けて声をかける。

「あの、待つて……！」

思わず右手首をつかんでしまったが、彼女は振り向こうともしなかった。

「何の用だ」

「あの。この前も、お会いしましたよね？すごく驚いてらっしゃいませんでした？」

「あんなところに人がいれば、誰だって驚くだろう。……離せ」

声が震えているような気がしたが、ティアスがそれを言うまえに、別の声が割って入った。

「手を離していただけませんか？」

あの時と同じ精霊だった。確か、ウィルトンとかいったか。

「あの時のことでおわかりかと思いますが、姫様はお身体が弱いん

です。何かある前に、お部屋にお連れしたいのですが」

整然と語っているようだが、精霊は始終ティアスのほうを向こうとしない。シルスはいえ、やっぱり口を開かず、まるで彫像のように固まっていた。

手を緩めながら、ティアスは静かに問いかけた。

「……………あなたは、誰なんですか」

シルスはほんの少しだけ振り向いた。なにかを堪えているような、怒っているような　形容しがたい表情で。

「……………ただの、死に損ないだ」

そして、今度こそティアスに背を向け、ゆっくりと去っていった。

「……………よく感情を抑えたわね、あの子」

シルスの背を物陰から見送りながら、フレアはシティに耳打ちした。

「よく覚えておいでですね、ここの構造を」

「そりゃ、昔は始終ここにいたもの。それより、あの子がここまで見に来ていたのが驚きじゃない？やっぱり　そうすべきだわ」

シティが、1つ息をついた。

「それにしても、早々に姿を隠してどうされるのかと思えば…………。前回のパーティーのときも、こうでしたでしょう？」

これには、フレアも苦笑した。

「だって、王が私の顔を覚えている可能性は結構あるもの。彼があなたたちをどうこうするとは思いがたいけど、危険を避けるに越したことはないわ。　じゃあ、戻りましょうか。会場へ」

その会話を聞くことができた人間は、その場にはいなかった。

## 9 再会（後書き）

んー・・・当初の予定よりおしている・・・。なんか15話ぐらいまでいっちゃいそうな雰囲気です。

## 10 見つけた2人

薄暗い建物の中をうろろしながら、ティマスはさっきのことを  
反芻<sup>はんすう</sup>していた。

あまりに腑に落ちなくて、パーティーに戻る気にはなれず、かといつて、どこに行きたいのかもはっきりせず、ただ何となく、足を動かしていた。

気付けば、まったく見覚えのない一角に入り込んでしまっていた。立ち止まったのは、声が聞こえてきたからだ。しかも、ついさっき聞いたような声。間違いない、シルスの声だった。

「会場にいらっしやなくて、よろしのですか？」

会話の相手は女性らしい。ティマスは声の出所を探した。

「私ひとり消えたところで、痛くも痒くもないだろう。王にとつても、あの客達にとつても」

見つけた。あのシルスが、女性に詰め寄っている。ページユの長い髪を一部だけ後頭部でまとめた、物静かそうな淑女然とした人だ。

「というより、単に私を殺しそこねただけのお前に心配される筋合いはない。……10年も前に、すでに見捨てていたくせに」

女性が、少し笑ったようだった。自嘲とも苦笑ともつかない笑みを浮かべ、しかし口を開くことはなかった。

「それで？ わざわざここまでいらっしやった理由は、そのことで私を責めることではないのでしょうか？」

「わかりきった事を聞くな」

シルスが、吐き捨てるように答えた。

「私がこんなところに来る理由なんて、お前なら考えるまでもないだろう。それも、城内の者がパーティーのために出払うこの日に来たことでわかったはずだ。今日こそ教えてもらうぞ。……母様を殺した奴の正体を」

ティアスは声を出すことを危うくこらえた。お母さんを殺された？というか、お母さんって誰？

「……お教えしたところで、どうなりましょう？まあ、私がすでにその犯人を突き止めていると思うまでに、信賴して頂けていることには感謝しますが」

「はぐらかすな。でなければ、そんな無能な術師をあの一とが、王の専屬にしているわけがない」

「しかし、あなたがその後にはれることはわかりきっておりますし、王は復讐など望んでおられません。確か、当時も申し上げたと思いますが？」

シルスの顔に、赤みがさしたような気がした。

「……ああ、だから10年間口をつぐんできた。しかし、それを知らなければ私は死ぬに死ねないんだ。この意味がわかるだろう。ただの心境の変化で、問いつめにきた訳じゃない。私には、知る権利があるはずだ。あの幸せな生活を壊した元凶をな」

言っている間にも、シルスの興奮は増しているようで、怒りと苦しみがなくまぜになったような表情で声を荒げる様子は、少し大人びてはいるものの、「1人の少女」の顔だった。

これ以上、聞いてはいけない。

そう思った。さっきの話は、恐らく彼女の聖域。私のような、無関係な第三者が聞いてしまっているものではない。

(……？無関係……？)

自分で思ったことになぜか違和感を感じながら、ティアスは2人に気付かれないようにそこを離れた。そして、なんとか2人が見えない位置まで行ったとき、別の声がティアスと呼んだ。

「ティー、どこ行ってたの？もうパーティー終わるよ？」

呆れ顔のレージに数瞬だけ言葉が詰まったが、なんとか返す。

「あ、うん……ちょっと。もう戻るよ」



怪訝そうなレージが歩き出すのに従って歩きながら、ティアスは新たな違和感を咀嚼<sup>そしやく</sup>していた。

会場に戻るのにかかった時間は、あの2人を見つけるまでにかかった時間より、かなり短かった気がした。

## 10 見つけた2人（後書き）

間が空いた割に、同じ日の話だったという・・・。  
あと5話・・・ぐらいで終わります。ひたすら種明かしが始まります。

11 解けた封印（前書き）

ちょっと長めです。

## 11 解けた封印

リビングに入ると、フレアひとりだけが椅子に座っていた。

その時を狙ったのだから、当然といえば当然だ。

「どうしたの？」

気付いたフレアに、表情を緩められないまま問う。

「……ちよつといい？」

「いいわよ」

是の返事に、ティ阿斯も向かいの椅子に腰を下ろす。

まるで、娘の「話」がなんなのか、わかっているような目でティ阿斯を見る。

「前置きなしで聞くよ。私は」

覚悟を決め、一気に言い切る。

「私は、お父さんとお母さんの本当の娘じゃないよね？」

強張った表情の娘にわずかに目を細めたフレアは、あっさりと答えた。

「そうよ、お母さんとティ阿斯は血が繋がってないわ。にしても、自身ありげなのね」

ティ阿斯はわずかに逡巡したが、口を開いた。

「……お母さんが夜中に、お父さんと話してるの聞いちゃって。私を実の娘として育てる、って……」

「……………」

数瞬だけ言葉を失ったようだったフレアだが、突然笑い出した。

「なあんだ、あれ聞いてたの？最近なんか様子がおかしいと思ってたけど、そういう事だったのね」

「話、そらそうとしてる？……誰なの？私のお父さんとお母さんって」

「それは、私が教えるべきことじゃないわ」

先程とは打って変わって真剣な顔になったフレアが席を立った。

いや、もうひとつの変化にティアスは気付いた。フレアの一人称。いつも「お母さん」といつていたフレアが、今「私」と自分を表した。

「……どういうこと？」

「私の口から、話すべきことじゃないのよ」

言いながら、背後の引き出しを開けた彼女は、ティアスが知らない顔をしていた。そして、そこに入っているものを見つめながら、フレアは静かに言った。

「あなたが、思い出すべきことなのよ」

彼女が取り出したのは、朱色の玉。そう、前のパーティーのとき、ティアスがちらりと見かけたあれだ。フレアは、まっすぐにティアスを見つめて、続ける。

「約束してちょうだい。全てを思い出しても、ちゃんと受け止める…逃げないって。これから見せることが、どんなことでも。

約束してくれないと、私はお父さんにもシテイ達にも、顔向けできないわ」

ティアスがうなずくと、嬉しそうにわずかに微笑んだフレアは玉に掌をあて、何事が囁くと、最後につぶやいた。

「封じられし者を　開放する」

その玉が淡い光を放った、瞬間。

何かが、ものすごい勢いでティアスの中に流れ込んできた。

映像、色、声、感情……。それは、記憶だった。

ぴくつと反応したウィルトンに、シルスは怪訝な視線を向けた。

「どうした？」

「……この気配　いや、そんなはずは……」

「何だ？この部屋を訪れる者などそういまい。まさか、あの子が来るわけもないしな」

苦笑しながら扉を開けると、信じられない光景があった。

「……どうして……いや　どうやってここまで……！？」

「　　シッ！大声出したら怪しまれるでしょ？」

ティアスは、口に指を当てた。用心深くあたりを見回し、さらに声を潜める。

「とりあえず、部屋に入ろう。誰かに見られたりしたら面倒だし」

「……どうやって城門を越えた？」

尋ねつつ、シルスは混乱していることを自覚した。扉を閉め、ティアスが微笑む。変わらない部屋。少し狭く感じるのは、自分が成長したせいだろう。

「シティを借りたんだよ。知ってるでしょ？シティの力」

突如ティアスの脇に現れたその精霊に、シルスは嘆息した。これは、確定的だ。かすれた声を搾り出す。

「……ティアス……やはり」

「そう。お母さんが思い出させてくれたの。……姉様」

次の瞬間、別の精霊が現れた。朱色の髪を腰までたらし、懐かしい姿。

「……ゼイル　」

もう二度と、その精霊と会うことはないと思っていた。ウィルトンと同じように、出生と同時にティアスに与えられた精霊。そしてフレアが長年、ティアスの記憶とともに封印してきた精霊でもあった　王家の人間である証。

「でも、なぜです？私達は、ティアス様の記憶が戻されることはない、と、覚悟しておりましたのに」

ウィルトンの言葉は、そのままシルスの心境だった。……そう。なぜ今になって。

ティアスは、手近にあった懐かしい椅子に触れた。

「お母さんは、忘れられなかったんだよ。母様のことも、姉様のことも。傷を負ったのは私達だけじゃない。10年前のあのとき、もう決めてたそうだよ。私を育てて、事実を受け止められるくらい大

きくなったら、記憶を全部戻すって。お父さんを説き伏せて、待ってたんだって」

そこでディアスは、椅子に落としていた視線をシルスに向けた。ここからは、自分が聞く番だ。

「私も、聞きたいことがあるの。姉様、どうして……」

その先を予想して、シルスは顔をゆがめた。それこそ、自分とウィルトン以外は誰も知らない、王宮の闇。……死んだほうがましだとさえ思った、日々。

「十年前と同じ姿なの？」

## 11 解けた封印（後書き）

これから、延々種明かしタイムです。

飽きられないか心配ですが・・・お付き合い下されば嬉しいです。



## 12 昔語り（前書き）

ひたすら昔話です。

## 12 昔語り

「大丈夫？」

全ての記憶を流し込まれたティアスを前に、フレアは心配げに尋ねた。

「……………」

しばらく黙り込んでいたティアスだが、不意に口を開いた。

「……………お母さんは」

「ん？」

ティアスは、フレアの顔を見ることなく続けた。

「父様を……………知ってるんだよね？」

流れ込んできたのは、幼い日々の記憶。ただ、その中のどこにも、『父』のことはなかった。フレアは1つ息をついた答えた。

「ええ。あの人とセレスティが会うことを、私が手助けしたからね。あのふたりは、本当に愛しあっていた。……………今となっては、誰も知らないことだけど」

「誰も知らないって、どうして？父様って、いったい誰なの？それに、お母さんはどうして、母様とあんなに親しかったの？母様は、あの時はまだ……………」

まだ本調子ではないティアスを家の外に連れて行き、フレアは壁に背中を預けて続けた。

「そうだね、順を追って話そうか。そう　あの当時、セレスティは一国の女王だった。その彼女と私が親しくなった理由は、私が彼女に仕える立場だったから」

「仕える　？」

「そう」

フレアは、少し切なそうな笑顔をティアスに向けた。

「私が昔、『ツイスト』だった事は知ってるわね？そして、代々の

王家の護衛は、その『ツイスト』の中から選ばれてきた」

「……ああ、そういえば」

前に、そんな話をレージから聞いたような気がする。

「でもお母さん、今まで王様の護衛やってたなんて、全然」

「彼女のことは、『あの日』から、おおっぴらに話さないことにしたのよ。とにかく、私は彼女を守るという役目を果たしていた。16年前までの数年間ね」

「16年前……つまり」

「そう　彼女が、あなた達を身ごもったとわかるまで」

「……………」

しばし沈黙したティアスが再び口を開いたとき、その顔には苦悩にも似た表情が浮かんでいた。

「……父様は、もう……………」

記憶が戻った時点で、予想はしていた。フレアは目を閉じた。

「死んだわ。セレスティの懐妊がわかった時には、もう彼はこの世にいなかった。彼は、元々王宮とはなんの関係もない人だったの。」

……王位を継いで数年たった頃、セレスティは長期の休養に出かけた。国のはずれの小さな村にね。お忍びで、同行したのは数人の護衛と召使だけだったわ。そこで働いていた青年が、あなた達の父親。顔を合わせているうちに、2人はすっかり意気投合してね。彼女がとても嬉しそうに笑うし、私も彼を気に入ったから、周囲に気をつけながら仲立ちをしたりしたけど、……急いで王宮に戻って懐妊がわかった時には、さすがに驚いたわ」

「急いで？」

ティアスの言葉を合図にするように、フレアの眼差しが鋭くなった。

「もう少しでそこを去るといっ頃に、宿が盗賊に襲われたのよ」

「……………」

何かが引つかかる気がして、ティアスは記憶を探った。

16年前、国はずれまででかけた当時の王。そこで盗賊に襲われ、王を守って数人が死んだ。それは、王仕えの召使と。

「まさか、その死者のひとりか、……父様？」

「どうかしたの？」

ティアスは、ロイリーに聞いたあの話をした。フレアの表情にも動揺が浮かぶ。

「そう、そうね。あの時は数人の死者が出て、そのひとりが彼だった。私はセレスを守ることに手一杯で、彼を守りきれなかったの」

ティアスは眉根を寄せた。確か、その事件は伏せられたらしいとロイリーは言っていた。

「まあ、大々的に公表したい事ではなかったけど、彼の存在の理由のひとつね。盗賊の報に、セレスティは真っ先に彼を心配し、様子を見に行こうとしたから。王宮関係以外の死者が彼ひとりだったから、いらない噂をたてられないように隠蔽したの」

「……そんなの……」

「大急ぎで王宮に戻った人間から事情を聞いた、元老たちが決めたのよ。王家の権威が下がったら、自分たちが色々やりにくいってね」ティアスは、さっきの「16年前まで」の言葉の意味がやっとわかった。

「それが原因で、お母さんは護衛をやめたの？」

再びティアスに向けられたフレアの表情は、力が抜けたような笑顔だった。

「そう。まあ、守るべき主君にどの馬の骨ともわからない男を近づけて、懐妊までさせちゃったら、それは駄目よね。彼女は未婚だったし。あの時はまだレージも小さかったから、育児に専念しろと言われたわ。そのせいで、父さんは仕事の制約がなくなって、気楽にあちこち行くようになったんだけどね」

しかし、彼女は思い出したように付け加えたのだった。  
「でも、後悔したことはないわ。お役目として失格でも、私は彼女が大事だったから」

## 12 昔語り（後書き）

長ー……。ちなみに次も長いです。

### 13 明かされる謎（前書き）

サブタイトルがめっちゃ今更や・・・（汗）いや、ほんとに考えるの苦手です。

### 13 明かされる謎

「……そう。それが、あの事件の真相か……」

まったく外見年齢の違うふたりの少女が、真剣な顔で向かい合っていた。先に目を逸らし、口を開いたのはシルスだった。

「予想はついていた。母様が未婚だったことと、父様についての記述がどこにもなかったから。あの元老たちが、「女王が父親もわからない子供を産んだ」なんて、公表するわけがない。……フレアは、本当に母様を大事に思ってくれていたのね」

「母様も頼つてたと思うよ。だから、シティに気配を消す能力<sup>ちから</sup>まで与えてお母さんが城内に入りやすいようにしたり」

沈黙がおりたところで、ティアスが再度、姉を見据えた。

「今度はこつちが聞く番だよ。どうして、あの事件前と同じ姿なの？どんな術がかかって……」

生を受けてから、ティアスとシルスは城門に近づくことさえ許されず、王宮の奥で軟禁状態で育てられた。理由はわからなかったが、ふたりは幸せだった。小さな少女にとっては十分な行動範囲もあり、勉強も、草花を愛でることも、小鳥と戯れることもできた。忙しかった母は、それでも双子の娘たちを本当に可愛がった。何も望むものもない、幸せな生活。

それは、唐突に崩れ去った。

10年前のあの日。ふたりは一生懸命つくった首飾りをプレゼントしようとして、母の部屋のドアを開き、見てしまった。身体の至る所から血を流し、倒れている母の姿を。そして、それを看取ったという母の親友の姿を。

フレアは母の死と、彼女にふたりを連れ出すよう頼まれたことだ



けを手短に告げ、何がなんだかわからなくなっているふたりを連れて城門まで急いだ。このままここにいては、どうなるかわからない。

王の死に混乱した王宮から抜け出すことは、フレアの魔力やシテイの能力を駆使すれば容易だった。しかし、フレアもよほど動揺していたのだろう、シルスと途中ではぐれたことに気付くのが遅れた。

そして、最終的に元老たちに捕まったことが、シルスの決定的な不運だった。

城から逃れたフレアは、すでに心を決めていた。家に帰りついた彼女は、泣きじゃくるティアスを寝かしつけ、夫の協力を得て術をかけた。記憶をあやつり、過去を封印し、『自分の娘』としての生を埋め込んだ。

ティアスが聞きたいのは、その後の話だった。王宮で、いったい何があったのか。

「呪い、よ」

無感動なシルスの答えに、ティアスは顔をしかめた。

「それは想像つくけど……身体の成長を止める呪いなんて、あったかな？」

治癒系統も攻撃系統も、主だった術や呪いはおおかた学校で習う。が、ティアスには覚えがなかった。

「学校で習っていらっしやるかどうかは、わかりません。学生にはまず使えないほど、魔力を要する呪いです。元々、別の目的で使われるものですが」

ウィルトンの説明に続き、シルスがつぶやくように答えを明かした。

「……『死の呪い』」

「『死の呪い』を受けて、助かったのですか？」

ゼイルが、思わずといった風に割ってはいる。答えたのはウィルトンだった。

「『死の呪い』は、その魔力の強さによって可否が決まります。姫様の内なる魔力は、現在の王族では最高ともいえるほどです。術者の力不足だったのか、姫様を侮っていたのか……術は失敗しました。しかし、失敗してなお、影響のある術でした」

「『死の呪い』が失敗した場合……」

ゼイルのつぶやきに、シルスが答える。

「その余波は、かけられた者の『何か』を壊す。それは身体の一部だったり、感覚だったり。私の場合、それは『身体の成長機能』だった」

沈黙がおりた。やがて、ゼイルが声を搾り出す。

「……では、シルス様のお体は、一生そのままなのですか？」

「それだけではありません」

答えておいて、ウィルトンがティアスに向き直った。

「以前、姫様は発作を起こされました。覚えておいでですか？」

「ああ、眠ってたのに突然……」

「呪いが、身体を蝕んでいる、という事ですか」

眼光を強めたゼイルに、シルスが一息ついて応じた。

「ゼイルは、変わらず鋭いな。そう。私の命は、もう長くない。呪いを受けて、もう10年。だから、私は死ぬ前に犯人を突き止め、魔力をすべて使っても殺す」

「駄目」

瞬間的にティアスは口を挟んだ。禁止というより、拒絶の響きで。幼い姉の肩をつかむ。

「命は大事にしなきゃ。姉様」

「どうせ、私はもうすぐ死ぬ。だったら」

「それでも」

一息ついて、ティマスは続けた。

「死んじやだめなんだよ。母様のために。そして、母様を命が  
けで守った人たちのために」

それは、シルスの知らない、ティマスの親友の話。

「私の親友は、昔、母様に仕えてた人たちの子供なの」

彼らは、ティマスたちの母を守るために死んだ。そして彼女は、  
ティマスたちのことを親友に託して亡くなった。だから。

「自分から、死ぬようなことなんて、駄目」

「……………」

その時 別の声が響いた。

「やはり、お戻りでしたか」

### 13 明かされる謎（後書き）

はい、やっと過去編終了です。あー長かった。とりあえず1話2000字を越えないように書いてるんですが、元の文章より伸びる伸びる。これでもあちこち削ってるのになあ（汗）

## 14 真相

いつの間にか部屋に入ってきていたその人物に、ふたりの姫はそれぞれの反応をした。

「お前……！」

「……『メーチ・ローレイ』？」

すぐさま憎々しい視線を送るシルスとは対照的に、ティアスは恐る恐る、といった体でその名を呼んだ。名前は知っていたが、ティアス自身に彼女と関わった記憶はない。

現在の王の父であった先々代の王にその素質を見出され、ずっと、王家にのみ仕える術師としてその名を知られてきた女性だった。

「やはり、戻られていたんですね。王家とは違う気配を感じたので、来てみたのですが」

「ティアスは王族だ」

さつきとは打って変わった低音の声音で、シルスが返す。

「まぎれもない王の子だ。おまえたちが、勝手に傍流にしただけだ」

「私達が」というより、あの強欲な元老たちが、ですね」

間接的に、そして簡単に、メーチは前言撤回した。そして、哀愁のようなものを浮かべた瞳をティアスに向ける。

「本当に王宮から追放されるべきは、あなた方ではなく、あの者たちでしょうにね……」

「我が主を、抹殺に来られたのですか？メーチ様」

ゼイルが、警戒心をあらわにした声を出した。この女性がこの部屋までくる理由なんて、それ以外には考え付かなかった。

ずっと、王家と国のことだけを考えて生きてきた女性だ。

「申し上げましたように、ティアス様のお戻りを確認するためですよ。予見はしてありましたから、いつもよりこの周辺の護衛は薄くしておりましたが」

シルスが、安堵とも呆然ともつかないため息をついた。

「……………いつから予期していたんだ？」

「つい数日前ですよ。このくらいの動きは予知できませんと、この国を背負う方の補佐などできません。……しかし、あなた方親子には狂わされ通しですね。元々、あなた方の誕生そのものも齒車の狂いでしたが、先代はあの傷で召喚の術など使われるし、その友人は10年もの間、私の探索を欺かれました。私も、老いてきたという事でしょうか」

物静かなことで知られる彼女の饒舌<sup>じょうぜつ</sup>ぶりに違和感を抱きながらも眉根を寄せて聞いていたシルスが、言葉の途中から顔色を変えた。

「姫様？」というウィルトンの言葉も耳に入っていない。

「……………おまえだったのか？」

その台詞を同時にシルスの顔に怒りが浮かんたとき、ウィルトンもその意味に気付いた。そして       ゼイルも。

「おまえだったのか!？」

シルスが声を荒げたときには、メーチ自身もシルスの異変に気付いたらしかった。しかし彼女が動揺をみせたのは一瞬で、すぐに、元の穏やかな表情に戻った。

ひとりだけ事態についていけないティアスに説明するように、シルスは言葉を続けた。

「答える。おまえだったんだな。       母様を殺したのは」

「え!？」

驚いたのはティアス一人だった。

「……………考えてみれば、あの事実そのものが、お前がやったという根拠のひとつだな。誰もが認める術と予知の腕を持つお前が、『王の暗殺』とそれが引き起こす混乱を、予知できなかった訳がない。そして、お前はあのとき母様のところに来なかった。そのお前が、厳重な保護呪文に守られたあの部屋で殺された母様の傷の様子を知っていたはずがない。母様の遺体进行处理し、『王の病死』を広めたの

は叔父様　あの王だ」

シルスの糾弾を黙って聞いていたメーチは、やはり穏やかな顔で口を開いた。どこか嬉しそうにすら見えたのは、ティアスの気のせいだったのだろうか。

「……ええ、その通りです。あのとき、いつになく興奮していた私のかわりに、あの方がすべての采配をとられました」

あっさりと白状され、焦ったのは姫と、その精霊たちだった。

「……何故ですか！？あの方は姫様たちの存在をちゃんと隠し、王位継承の権利も、返上されていたのに！」

ウィルトンの声は上ずっていた。そう　彼女がセレスティを殺すとしたら、それしか理由がなかったのだ。

それには答えず、メーチはふたりの姫に目を向けた。

「あなた方さえお生まれにならなければ、あんなことは、考えもしませんでした」

ゆっくりと目を閉じた彼女は、寂しげながら、穏やかな表情のままだった。

先々代の王に目をかけられ、メーチが国一の術師になるのに、そう時間はかからなかった。

その王が亡くなり、王女セレスティが女王として即位しても、彼女と王の関係は変わらなかった。

変わったのは、彼女が非公式に双子の娘を出産してからだった。

王の懐刀にもなっていたメーチの言葉を、セレスティは拒むようになった。彼女の意味ではない、ある取引のために。

姫の立場が弱かったのだ。王位継承の権利を生まれたときに返上させられた王女たちは、身を守ることも公にはできなかった。そして、元老たちはそこを突いた。姫を守る代わりに、元老の権力を増やせ、と。

「……母様が、あいつらと取引を」

シルスは、半ば呆然としていた。メーチの顔が、初めてゆがんだ。「あの方が王であるかぎり、誰が元老になろうと不安がつきまとい

ます。しかし、王位の交代を促せるような事実是他になかった。

……いえ、見ていられなかったのです。だから」

「……私に、『死の呪い』をかけたのもお前か？」

頷いたメーチに、シルスはただ沈黙を返すことしかできなかった。



## 14 真相（後書き）

か、かつてない長さ・・・！それでも大幅に削ったのに（汗）  
穴ボコな話だと承知の上で始めたけど、こうして書き直してみたら  
本当にボコボコだったというオチ？幼かったなあ自分。  
次でラストです。

## 15 落着

「叔父様　王は、あなたが犯人だと？」

ティアスの問いに、メーチは頷いた。

「お気づきでしょうね。あの事態を予期しなかったことと、あの時の私の狼狽ぶりを考えれば、答えは出ます」

「……なのに、何の罰も与えず、城に置いてきたのか？母様は実の姉だろう！」

「この国のため、でしょうね。王が殺されたなどと、広まれば王宮は疑心暗鬼に襲われます。セレスティ様はそんなことは望まれなかったでしょう」

ゼイルが、静かな声で答えた。付け加えるように、メーチが続ける。

「罰、だと思えます。私の罪を知るあの方に仕え、殺そうとしたシルス様の顔を見ながら、この国のために尽くすこと。……命尽きるまで。それが、私の償いです」

「……」

それまでじつと聞いていたティアスが、これ見よがしなため息をついた。

「姫様……？」

「ティアス？」

「……ごめんなさい」

その言葉が誰に向けられたものか、一瞬全員が首をひねった。

「母様は父様を愛してたから、私達を産みたがった。でも、それはあなたにとっては困ることだったんだね。私は母様が大好きだし、あなたを赦すことはできないかもしれない。……けど、母様も王として、譲っちゃいけないものを譲ってしまった。そこは、娘として謝ります」

「……ティアス様」

しばし呆然としたメーチが、シルスに目を向けてみると、彼女は唇を引き結んでいた。苦しそうな瞳とかち合う。

責められ、憎悪されるとばかり思っていたのに。

「……あなた方は、ほんとうに王家の血を継ぐ方々ですね」

このふたりは、王家の人間として育てられていない。けれど、ちゃんと広く国を見渡せる目を持っている。まさしく、あの強かった女性<sup>ひと</sup>の子だ。

メーチが引き取ると、シルスは帰ろうとする妹を引き止めた。

「ひとつ聞いてもいい？」

「なに？ 姉様」

シルスはひとつ息をおいて尋ねた。

「あの時いつてた夢、叶ったと思う？」

ティアスは『あの時』の意味をはかりかねて考え込んでいたが、思い出したのか、「ああ」と小さくつぶやいた。

それは、まだふたりが何も知らず、王宮で暮らしていたとき。シルスは、妹に聞いたことがあった。

ティアスには、ゆめつてある？

ティアスは少し考え込んだが、笑顔で答えた。

うーん……かあさまとねえさまと、ずーっとこうやって、いつしよにいられたらいいな。

そして、シルスが相槌を打つまえに、思い出したように付け加えた。

あ、でも、もしかかなうなら……。なに？

『おそと』にでたいな、ねえさまといっしょに。

そして、照れくさそうに続けた。

どうして『おそと』にでちゃいけないのか、わからないけど。いつか、かあさまとねえさまと、『おそと』をみてみたい。

「叶ったと思う？」

そうだなあ、としばし考えたティアスは、なにやら決意したような顔で。

「これから叶えばいいよ」

はっとしたシルスに、ティアスは続けた。

「私、王宮に入るよ。母様が生きた王宮に戻って、姉様を守る仕事を。うちはレージが『ツイスト』だから、他の家よりよくわかるしね。姉様が元気なうちに、自分の力でここに帰ってくるから待ってて」

「……ティアス……」

笑うティアス。こんな光景を、何度も夢に見た。自分と同じ年齢のままの妹を。

けれど、今ここにいるティアスは、成長した姿で笑っている。記憶の中と、寸分変わらない笑顔で。

（……。死ねなく、なってしまった）

頬を流れる涙を感じながら、シルスは独りごちた。

大切な、たったひとりの妹が、戻ってきてくれると言った。あの頃と同じ笑顔をみせてくれた。これでは、生を諦められるはずがない。

「ティアスー！早く起きないと、また遅刻するわよー！」

翌朝、いつもと変わらないフレアの声で、ティアスは跳ね起きた。

あの事件は、結局公表しないことで落ち着いた。母ならそう願うだろうと、フレアたちとも相談した結果だった。

シルスは相変わらぬ軟禁生活だが、メーチの術で、命数はかなりのびたらしい（術の効果を完全に消すことはさすがに不可能だそ

うだ。『死の呪い』は甘くない)。ティアスも、将来を見越せる猶予期間が増えたし、なによりメーチの協力で、姉妹が会うことは以前より難しくなくなる。

それでも、メーチの罪を忘れることはできないけれど。

ティアスにとって、大切な当たり前の一日が始まる。これから、ずっと続いていく日々が。

## 15 落着（後書き）

とりあえず15話で終わりました。というか終わらせました。  
ものすごくふわふわしてる（つまり地に足着いてない）話だということ  
は自覚してます。お付き合い下さった貴重な方、ご苦労様でし  
た（汗）

少しでも「面白い」とか思ってもらえたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0803j/>

---

And I still want

2010年10月8日14時39分発行